

はじめに

大 瀧 雅 之

本特集は「ケインズとその時代を読む」と銘打って、広く古典の重要性を訴えるために、20世紀の生んだ著名な経済学者・経済思想家の代表的著作を取り上げ、それぞれの筆者が自らの解釈のもとで咀嚼し、内容を批判的に紹介・検討したものである。読者はそれぞれの論考に違和感を見出すかもしれない。しかしそれはそれで良いのである。もしそうであるならば是非原典に当たって、自らの見解を持つよう時間をかけて味読して欲しい。本特集が、そうした労力は要るが長期的には自己に果てしなく大きな成果をもたらす営為のためのきっかけとなるならば、編者にとってこれに勝る喜びはない。

最近の経済学徒の在り方は、極端に二極分化しており、これは経済学発展の著しい障碍となっていると、私は考える。すなわち一方では、全くと言ってよい程現実から遊離し、かつ、まともな自然科学研究者がみたら腹を抱えそうな「数学」を用いた「ジャーナル論文」に血道を上げている若い研究者の数は膨大である。彼らは血の通った人間が形成する社会の在り方などとは無縁の徒である。取るに足らない論文のそのまた取るに足らない無意味な拡張で、「インパクトファクター」と称する偏差値を気にしながら、論文を書く。いったいそんなことに何の意味があるのであろうか。単なる無味乾燥の受験勉強の延長にしか過ぎないのではないか。

ここで取り上げられた書物は、いずれも経済学史を飾る著名で優れた書物である。そしてその著作の多くは、二つの大戦に挟まれた危機の時代に書かれている。しかし数式の使用は驚くほど少ない。確かに数学に常識程度通暁することは、現代の理論経済学にとって、大変重要で便利なことである。だが理論経済学の命は、マーシャルの言うように「温かい心と醒めた頭脳」で人間社会の発展を期することであることは、今も変わらない。古典を繙くことで、時代と格闘した先人の汗を想うことは、同時に現代を生きるわれわれが、如何に歴史に条件付けられているかを知ることを通じて、必ずや自らの知的・社会的視野を広げることに繋がる。こうした高い見識なくして、一つの時代の変わり目である困難な現在を論じようなどとは、ゆめゆめ叶わぬことであることを知るべきである。

アカデミズムに携わる経済研究者の多くが、こうした「偏差値主義者」であることから、一つのニッチが生ずる。このようなニッチは、大学のアカデミズムに身を置きながら、現

はじめに

実の経済を解析する研究者が不在になっていることから生ずるのである。本当は正体不明の「アベノミクス」、常軌を逸したとしか言いようのない「異次元金融政策」（この世は4次元のミンコフスキー空間でしかありえないことを、「異次元」という用語を使う人々は知っているのか。こうした言葉が流布されることこそ、現代日本の深刻な病理である「反知性主義」を象徴している）を理論的にどう解釈すべきなのか、雇用環境の安定を削ぐ「派遣労働法」の緩和、「失業の輸入」でもある野放図な対外直接投資、をどう評価し、いかなる対処が必要なのか。マスメディアに登場する「経済学者」と称するもうはるか昔に研究を止めてしまって「タレント業」に転身した多弁な人々は、実は何も確信的な答えを用意していないし、何の責任を持って語っているわけでもない。かれらはメディアの傀儡である。こうして真面目な職業的経済学者からすると、到底理解できない、誤謬と矛盾に満ちた世論が形成されているのである。

実を言えば筆者は、ある程度諦めている。既得権益に絡め取られた大人はもうだめである。本特集は、ひたむきに筋を通して生きているあらゆる職業人に勇気を持ってもらうために、そして真理探究や社会厚生の上昇のために一生を捧げようとする気概のある若人に、いつの時代にも苦難があることを知らせるために編まれている。そうして真摯な思いがやがて一つの力となって、この困難な時代を乗り切る原動力となることを、私は願って止まない。